
もしも魔王が封印されたら

リエロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしも魔王が封印されたら

【Nコード】

N4951T

【作者名】

リエロン

【あらすじ】

勇者との戦いに敗れ、ダンジョンに封印されてしまった魔王。

力を使うこともできず、ダンジョンから出る事もできなくなったのだが……。

目が覚めると、見知らぬ暗い洞窟にいた。

記憶をたどってみると、勇者と互いの必殺技をぶつけ合った事を思い出す。

「私は、敗れたのか……」

屈辱だった。一度は百万を超える大軍を指揮し、世界の半分にも及ぶ地域の独裁権を手にしたこの私が、こともあるうに勇者を名乗る若造に敗れてしまったのだ。

「ここは……」

辺りは見覚えのない場所だった。そして、自分が死んでいないという事も気にかかる。

「考えようにも情報が足りんな」
そう結論づける。まずはここから出ることだ。脱出呪文を詠唱する。

しばし待つ。

何も起きなかった。

「脱出呪文を無効にする結界が張られているのか？ ならば……」
閉じ込めようという算段ならば、この場所ごと破壊するまでだった。爆発呪文を詠唱。

何も起きなかった。

辺りを観察する。高度な対魔法結界が張られている様子が微塵もない、ありふれた坑道だ。

「巧妙に隠されているのか。余程の使い手だな……」

「それは違います、魔王様」

声がした方を見る。そこには見覚えのある女性の姿があった。

「お前は……、無事だったのか」

己の右腕として、数々の諜報活動などを行ってきた使い魔だった。

「果たして無事、と言えますか……」

「現状をまとめて話せ。どうなっている？」

「魔王様は勇者を名乗る人物に敗れました」

そこまでは想像したくはなかったが、認めざるを得ない現実だった。

「ですが、完全に滅ぼすことはできませんでした。こうして辺境の坑道に封印するに留まったのです」

「それが解けたと？ では魔力を行使できないのは、その影響か」

「はい。私にも魔力は流れてくる気配はございません」

「苦勞をかけるな」

「いえ、とんでもない。私はこうして再び貴方様のお役に立てるだけで恐悦至極でございます」

「嬉しい事を言うてくれる、ならば期待に答えねばならぬな」

「我が領土はどうなっておる？」

「は、魔王様が倒れたという報告を受け、各地の領主の戦意が消失し、人間共から持ちかけられた和睦が成立しました。現在の所、互いに不可侵条約を結び、戦争が一時終結しております」

想像に易い展開だった。そして、不甲斐なさを情けなく思った。

「やはり束ねる者がおらねば、烏合の衆か。あと一步で世界を手にするところまで行っていたというのに……」

「立たれますか？」

「無論だ。だが、そのためには魔力を取り戻さねばならんな」

「ならば、人間から直接魔力を奪い取るのが最善かと思われます」

「そうだな、スマートな方法ではないが敗者の身にはふさわしかろう」

一つの都市を滅ぼすぐらいで、十二分な力を得ることはできよう。

何よりも、素早く行動せねば状況は不利になるだろうと想像できた。

「まずは目に付き次第に襲ってくれよう。安穩と暮らしている人間の、慌てふためく様が目に浮かぶようだ……」

坑道の出口へと向かいながら、フハハハハと高笑いをする。

「ここが出口となります」

日の光が差し込んでいた。

「昼間か。どうせなら赤い月が輝く夜がふさわしいが、この際贅沢は言っておられまい」

坑道と、外の境目をまたごうとした瞬間。顔を激しく打ちつけ、派手に倒れる。

「ま、魔王様！！　どうなされました？」

使い魔が倒れた我を覗き込む。

「何かに……、顔を……顔を……」

「落ち着いてくださいませ、鼻血がちよつと出ているだけですわ」
驚きのあまり取り乱したが、大した怪我はしていなかった。

使い魔がぶつかった場所を調べている。

「どうやら、魔王様を外へ出さないための処置のようですね。ここに結界を貼っていたようです」

恐る恐る手を伸ばしてみる。そこには見えないが、確かに行く手をさえぎる何かがあった。

「私は外へと出られますので、魔王様のみに反応する結界のようですね」

坑道の外へと出られた使い魔が話している。

「おのれ勇者め、二度に渡ってこの魔王を苦しめるとはな」

「いかがいたしましたしょう？　私は諜報が任務でしたので、こうした場合に役に立つ人物を存じ上げないのですが」

頭の中に思い描いてみる。が、死亡説が広まった今となっては本

人がいかなば、説得に応じる人物とは思えなかった。

「私が出られれば、手っ取り早いのだがな。魔力を手に入れない事には……」

考える。我以外の者は通り抜けることができる。

「となれば、ここに入ってきた運の悪い人間を襲えばよいな」
出られなければ、入ってくればよい。魔力が戻りさえすれば、こんな結界を破ることは造作もなかった。

入り込んでくる、運の悪い人間を待つことにした。

「最初に出会った人間は殺さずに、この魔王が復活した事を知らせまわるメッセンジャーの役割を果たしてもらおうか」

「人間共の諸国の王も、魔王様の復活に恐れおののく事でしょう！」

和気あいあいと待った。

「なかなか来ないな。こうなれば、最初の人間から搾り取れるだけ取って、脱出の糧となってもらおうとしよう」

「目的のためには手段を選ばない、その非道さは相変わらずでございますね」

粘り強く待った。

「なぜ来ないのだ！！ この我をどれほど待たせようというのだ！！」

「落ち着いてください、ここは廃坑道になっているようでして、用

のある人間はいないようなのです」

「ならば、いつまで待っても来るわけではないか!」

「それもそうですわね」

作戦を変更する。来ないのであれば、来させればよいのだ。

「ならば命ずる。手近な町へと行って、この場所へと人間を連れて来い」

「かしこまりました。魔王様の命令とあらば」

そうして、使い魔は坑道の外へと出て行った。

残された我は暇になったので、実行するはずであった残り半分の侵略過程をシミュレートしてみた。

空しさのあまり、涙を流しそうになった。

使い魔が帰ってくる。一人だった。

「報告いたします。ここから手近な集落は人口数百人程度。農耕を中心とする自給自足が中心の、穏やかな村でした」

「そうか。で、人間はどうだった?」

「情報を収集しましたところ、この坑道はすでに勇者によってクリア済みのダンジョンと認定され、ここへ来る冒険者などいない、との噂が立っていました」

人間が立ち入る可能性はほぼ皆無という事か。

「で、人間はどうした?」

「どういたしましょうか?」

「質問に質問で返すな。どうした、と聞いている」

「は、最初は拉致を計画していましたが、魔王様からの魔力の供給が途絶えているせいで、私も最下級のモンスター程度の力しか発揮できないのです。分かりやすく例えると、スライムでございます」

かつては要人暗殺なども行い、人間の名だたる武将とも互角以上に渡り合った使い魔も、魔力が途絶えればそれほどまでに弱まるのか。

軽く落ち込んだ。

「いかがいたしましたでしょうか？」

再度尋ねられる。力押しによる戦術は無理だった。

最悪の想像が頭をよぎる。このまま、誰も来ない廃坑道で一生を終える、という想像だ。

「かつては世界中から恐れられた我が、そんな末路を迎えるわけにはいかぬ――！」

「ですが、現状は手詰まりでございます」

「目の前にいる男を誰だと思っている？ 策ならばある。人間をつれて来れぬであれば、来るように仕向ければよいのだ」

「しかし、人が来るようにと言いますが、どのように？」

「人間が来なくなるような、何かがあれば人など簡単に釣られるものだ。まずは坑道を見て回ろうではないか」

奥へ向かって歩いていく。

「見ろ、魔物がある。アレを討伐させるのはどうだ？」

「はあ、しかし見るからにやる気ありませんな。お宝も持っておらず、経験値も効率の悪い不人気な魔物です」

「何の役にも立たんな。嫌がらせに存在しているかのようだ」

「さらに道が分かりづらいな。先ほどから、同じところをぐるぐる回っておらんか？」

「ええ、印をつけておきましたが、同じところを回っております」

「無計画に拡張を繰り返した、ダメ坑道だな。これはストレスがたまると。お、宝箱があるではないか――！」

「中は空でございます。すでに勇者によって、取り尽くされたようでございます」

「宝箱は全部開けてから、進むタイプか――！　ますます憎悪が湧いてきたわ――！」

「ふむ、調査が終わったが、恐ろしいぐらい魅力がないという事が判明したな」

「再確認したともいえますわね」

「問題は、冒険者は何を求めてダンジョンを訪れるかの、ニーズの調査をせねばなるまい」

「かしこまりました。こういう活動であれば、私の得意分野でございます」

町へと情報収集へと向かう使い魔。

のんびりと成果を待っている魔王ではなかった。

「少しでも成果を見つけなければ、主従の関係が危ういからな」
せつせとダンジョンの調査に励む魔王であった。

「む！ この地点は」

そこに広がっていたのは、天然の鍾乳石だった。

無計画に拡張を続けた結果、天然の地下洞窟へとぶつかったみたいだ。

「我も数々の建物を持ったが、これほど綺麗なものが自然にできる
とはな……」

しばしその光景に見入った。

「魔王様、戻りました」

「ご苦労であった。調査の結果はどうだ？」

「は、冒険者のニーズは、和睦が成立したことにより、スリルやロ
マンを求める傾向から、楽しむためのレジャーへと流行が移ってい
るようです」

「レジャー……、なんともふぬけた世になったものだ。だが、好都
合だな」

「どうしてでございます？」

「丁度良いポイントを見つけた。観光スポットとして、このこと
やってきた人間を襲おうではないか」

「そなたと我は観光ガイドという設定で行こう」

「ではさっそく、誘いやすそうな人間を連れてまいります」

計画は順調に進んでいた。

「こんな所があつたんですねー」

「いかにも何か出そう……」

「どうぞどうぞ、現在はすでに魔物も危険ではなく、探索には最適でございます」

「何だか歴史を感じさせる場所ですね」

後ろ姿を見せる。今ならできそうな気がする。だが、殺気をみせたタイミングで絶妙に振り返る。

「何か由来とかあるんですか？」

聞かれても困る。と、素直に返事するわけにもいかず、かつては金が取れたなど、それらしい歴史を適当に語る。

「わあー、綺麗ですねー」

鍾乳石のポイントへとやって来る。人間にとっても絶景らしく、見とれている。

（今ですよ魔王様、がっばり頂いちゃいましょう）

隙だらけだ、今ならやれる。だが、不思議と体が動かない。

「ありがとうございますー」

人間が帰っていく。使い魔がこちらを怪訝な目で見ている。

「どうして、襲わなかったんですか？」

率直な問いかけだ。

くだらない話だった。それまで、この手を血に染めたこともあった。今更、何を言っているのだろっと思っ。

「どうやら勇者は、魔王様の大変なものまでも封印してしまったようですね」

外の風景を眺める。

「でも、一生ここで暮らすことになってもよいのですか？ 外に出たくはないのですか？」

「確かに、その気持ちはある。だが……」

見えない壁に向かって手を伸ばす。

と、体がそのまま何もなかったかのように通り抜ける。

「あれ？」

「な……」

「もしかして、魔王様の悪い心が消えたからですかね？ 変わった仕掛けもあったものです」

「そんなくだらない仕掛けがあるか。ただ単に、効力が切れたただけだ」

久方ぶりの外の外気を吸い込む。穏やかな抜ける様な青空だった。

「これから、どういたしますか？」

「平和になった世界を、平和なまま支配してやるというものも一興だな。ゆくぞ」

遠くに向かって歩いていく。その道のりは果てしなく長かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4951t/>

もしも魔王が封印されたら

2011年10月9日02時47分発行